



古代韓日における兄弟の死 - 祭亡妹歌と大伯皇女挽歌を中心に

저자 (Authors)	金慶美
출처 (Source)	일본문화학보 5 , 1998.8, 227-245 (19 pages) Journal of Japanese Culture 5 , 1998.8, 227-245 (19 pages)
발행처 (Publisher)	한국일본문화학회 The Japanese Culture Association Of Korea (Jcak)
URL	http://www.dbpia.co.kr/journal/articleDetail?nodeId=NODE01239099
APA Style	金慶美 (1998). 古代韓日における兄弟の死. 일본문화학보, 5, 227-245.
이용정보 (Accessed)	삼성현역사문화관 183.106.106.*** 2021/07/29 10:49 (KST)

저작권 안내

DBpia에서 제공되는 모든 저작물의 저작권은 원저작자에게 있으며, 누리미디어는 각 저작물의 내용을 보증하거나 책임을 지지 않습니다. 그리고 DBpia에서 제공되는 저작물은 DBpia와 구독계약을 체결한 기관소속 이용자 혹은 해당 저작물의 개별 구매자가 비영리적으로만 이용할 수 있습니다. 그러므로 이에 위반하여 DBpia에서 제공되는 저작물을 복제, 전송 등의 방법으로 무단 이용하는 경우 관련 법령에 따라 민, 형사상의 책임을 질 수 있습니다.

Copyright Information

Copyright of all literary works provided by DBpia belongs to the copyright holder(s) and Nurimedia does not guarantee contents of the literary work or assume responsibility for the same. In addition, the literary works provided by DBpia may only be used by the users affiliated to the institutions which executed a subscription agreement with DBpia or the individual purchasers of the literary work(s) for non-commercial purposes. Therefore, any person who illegally uses the literary works provided by DBpia by means of reproduction or transmission shall assume civil and criminal responsibility according to applicable laws and regulations.

古代韓日における兄弟の死

—祭亡妹歌と大伯皇女挽歌を中心に—

金慶美*

< 目次 >

- はじめに
- 兄の嘆き (祭亡妹歌)
- 姉の嘆き (大伯皇女挽歌)
- おわりに

1. はじめに

韓国と日本を代表する古代の詩歌として、韓国には「郷歌」があり、日本には、「万葉集」がある。この二つの詩歌集、「郷歌」と「万葉集」とは、相通うところが少なくない。「郷歌」は、統一時代から高麗時代の中葉(669-1120)にかけての花郎(新羅時代にあった青少年の民間団体)から平民に至る、あらゆる階級の人々によって詠われた歌々を集めている。「万葉集」も、七世紀初頭から天平宝字三年(759)までの、天皇から一般の庶民に至るあらゆる階級の人が歌った歌を集めている。また、「郷歌」における歌の表記は、漢字で表音式と表意式とを混用する「郷札」と呼ばれる

* 檀國大 講師, 日本上代文学

表記法によっている。この表記法は、いわゆる万葉仮名と実によく似ている。

韓国の「郷歌」と日本の「万葉集」ではほぼ同じ時期によく似た表記法によってあらゆる階級の人々の歌が歌われてきた。ただ、「郷歌」は『三国遺事』に十四首と『均如伝』に11首あわせて25首しか残っていない。反面「万葉集」には、4500余首がある。歌の数が少ない「郷歌」と膨大な量の歌を集めている「万葉集」との全体比較の研究は、多少無理があるように思われる。小論では、部分的な研究の方向から「郷歌」と「万葉集」に見られる同一主題の兄弟の死を中心に考察し、そのうえ古代の韓国と日本の兄弟観に関しても考えてみたい。

特に「郷歌」の「祭亡妹歌」と「万葉集」の「大伯皇女挽歌」は、ほぼ同じ立場でなされ、この世に残された兄の妹への、また姉の弟への哀悼の意が各々の歌から窺われる。

2. 兄の嘆き(祭亡妹歌)

『三国遺事』の郷歌14首中「祭亡妹歌」は、景德王¹⁾時代の月明師²⁾の作品で、亡くなった妹を慰めるため、齋を営みながら歌った歌である。亡くなった月明師の妹に関する記載は見当たらず、生没年も分からない。したがって、この歌のみによって月明師の妹の像を思い描かざるを得ない。

「祭亡妹歌」は、妹と死別した兄の悲しみを哀切に歌う亡妹への思慕歌である。このような兄弟の死を主題とする歌は「郷歌」にこの「祭亡妹歌」1首しかない。

祭亡妹歌³⁾

生死路隱	生死路는	生死の路は
此矣有阿米次盼伊遣	에 이샤매 저히고	此の世にあることを怯え
吾隱去内如辭叱都	나는가는다 말스도	わが逝く言葉すら
毛如云遣去内尼叱古	몰다닐고 가느닛고	いえないまま逝ったのか
於内秋察早隱風未	어느 마술이른 보르매	ある秋の日の早風に
良落履葉如 此矣彼矣浮	이에 저에 떠딜 님다이	いずこともなく散る枯葉のように
一等隱枝良出古	호든 가재 나고	同じき枝に生まれ
去奴隱処毛冬乎丁	가논 곧 모드온더	逝きしところ知らず
阿也彌陀利良逢乎吾	아으彌陀利에 맞보올내	ああ、浄土にて逢えるを待み、
道修良待古如	道닷가 기다리고다	道を修め待つのみ

「祭亡妹歌」は、はじめのところで述べたようにこの世に残された兄が妹へ送る思慕歌であり、哀悼歌でもある。この歌を通して、妹の死を現実として認めたくない兄のありのままの姿が見られる。「祭亡妹歌」を1句ずつみていくとその内容を大きく五つに分けることができると思う。

1. 生、死が共に存在する意識(1-2句)
2. 前触れもなく訪れる死への恐れ(3-4句)
3. 生に対する無常観と虚無観(5-6句)
4. 同父母から生まれた肉親の結びつき(7-8句)
5. 死後の世界に対する未知の不安(9-10句)

である。この「祭亡妹歌」を多くの研究者たちは、仏教歌謡として捉えている。作者である月明師自身が僧侶である以上仏教性が感じられることは当然のことかもしれない。しかし、本稿の考えでは、仏教性より一人の人間として世の中に残された兄の純粹な心で、この「祭亡妹歌」を歌っているように思われる。この点を考慮し次に「祭亡妹歌」を1句ずつ見ていくことにする。

1-2句の「生死路隱此矣有阿米次盼伊遣」(生死の路は此の世にあることを生だけではなく死も現在にあることを歌っている。この部分では、研究者によって異なった見解をみせている。その一つとして、仏教の縁起論の立場からの解釈がある。これに対して、朴魯埠氏は、次のように述べている。

生と死が一緒に存在することは、仏教の縁起論に立脚して、解釈することができるが、これは、儒教でも生死一如と言って、生と死の問題を否認しており、それによって解釈する事ができる。また、道教でも、同じように、生と死は、同伴者であり、死は、生の始まりとしているから、生死が一つであることは、必ずしも仏教の専有物とみることはできない。(『三国遺事の文芸的な研究』(祭亡妹歌の解釈))⁴⁾

このように、生死が共に存在するという立場は、必ずしも仏教思想から生まれるものではなく、月明師個人の死の認識に対する表現であると思われる。ここで歌われている「路」は、誰もが通る一般の道で、人間として生まれた限り、誰でも歩まなければならない道なのである。その死の道を妹は懼れていると歌っていることから、まだ成熟してない幼い妹の死を意味しているように思われる。このような見方は、次の3-4句をみるとさらに分かると思う。

「吾隠去内如辞叱都毛如云遣去内尼叱」(わが逝く言葉すらいえないまま逝ったのか)と歌って、死に向かう妹は、一言も言えずこの世を去っていった。つまり世の中のことも分からないまま死の世界に入っていった妹に対する嘆きと悔しさ、そこに生れる虚無感などがよく表れている。このような表現は、仏教観にはかぎらず妹に対する実兄の純粋な心からくるものであると思われる。

5-6句の「於内秋察早隱風末此矣彼矣浮良浮良落履葉如」(ある秋の日の早風にいずこともなく散る枯葉のように)では、妹を「葉」に喩え、その「葉」を落としてしまう「早隱風末」という媒体を登場させる。このような表現

は、月明師の独特に洗練された表現である。普通「葉」が落ちるのは、秋という季節が深まってからのことである。ところが、ここでの「早隠風末」は、季節の深まりきらぬ早い時期に吹く風によって葉が落ちる意味であるが、これは、妹の死が「早い死」(幼い死)であることを暗示するまことに美しく高尚な文学的表現であると思われる。

7-8句の「一等隠枝良出古去奴隠処毛冬乎丁」(同じき枝に生まれ逝きしところ知らず)は、月明師の感情がもっとも昂まって最高潮をなしているがここで「兄弟の結びつき」を「一等隠枝良出古」と歌っている点に注目すべきである。「兄弟」を「一等隠枝」と歌うことは、同じ父母から生まれた兄弟であることを意味する。一本の木の枝は、同じ早さで成長し、枯れる時も一緒に枯れてしまう。兄弟を「一等隠枝」に喩えることは、生だけではなく死までも共にするという同胞に対する認識が古代の韓国の人々にあったからではなかろうか。

そこで、月明師は「一等隠枝良出古去奴隠処毛冬乎丁」と歌っており、「妹が逝った所の道が分かれば追いかけて行きたい」という実兄の願望が込められていると思われる。「追いかけて行きたい」という願望こそ、愛する妹と死別して残された実兄の本当の気持ちではなかろうか。しかし、「追いかけて行きたい」という願望があるにもかかわらず、現実には、不可能な道であった。その妹が逝った道は追いかけて行けない所の道であることを実兄である月明師は実感し、その実感を通して妹の死を再認識している。それは、次の句からさらに明白に把握できる。

9-10句の「阿也彌陀利良逢乎吾道修良待古如」(ああ、浄土にて逢えるを待み、道を修め待つのみ)の「阿也」は、叫び声で生と死との葛藤が高潮に達すると同時に月明師の妹の死を認めざるをえない現実の中での諦念への交差点の句である。彼は妹の死を通して人々の生死の問題を深く見つけたのである。そして、彼は、現実の僧侶としての自分自身に戻るしかなかったのである。なぜならば、妹が逝った所の道を追いかけて行き

たいという実兄の願望があるにもかかわらず、現実には、妹が逝った道は追いかけて得ない所の道であることが分かったからである。この現実を事実として受け止めるしかなく、残された彼にとっては、僧侶としての立場でこの苦しみを乗り越えるしかなかった。彼は僧侶の立場に戻る事によってのみ、妹に会える事を自ら知ったのである。だから、「阿也彌陁利良逢吾道修良待古如」の表現によって、この歌を締めくくっているのである。この句に対して朴魯埠氏は、次のように述べている。

「阿也彌陁利良逢吾道修良待古如」において、月明師が中点を置いた言葉は「逢乎」である。その前後の「彌陁利」や「道修古」ではなかったと思う。この二つの言葉は、虚言であり、常套的な語であろう。亡くなった妹を悲しみ、哀痛に堪えなかった人間月明師は、執拗に再会を渴望している。ところが、その再会は、実のところ死の世界でしか果たされないことは確かである。その時の彼の本心は、彌陁利(浄土)で再会することだけに限定されておらず、この句以前の力強い(歌の)流れからみて、現実世界の中で「幻想」でも再会を願うことにあるのだ。それほど、彼の心情は絶実である。この意志率直な彼の本性が結詞でも、哀切に吐露されていることが確認できる 『新羅歌謡の研究』⁵⁾

「祭亡妹歌」の終句の仏教用語によって「祭亡妹歌」を仏教歌謡として捉える人も多い。しかし、前章でも述べたように「阿也彌陁利良逢乎吾道修良待古如」の句は、生死の問題の完全な解決、即ち死の克服を意味するのではなく、彌陁利(浄土)への到達が不可能だったことを通して、死の問題を克服しようとする願いであり、意志なのである。

以上で「祭亡妹歌」の作品を考察してみたが、月明師は、純粋な人間そのものとして、「亡妹」の実兄がその兄妹の愛情を歌っている。「祭亡妹歌」は、「亡妹」を偲ぶ兄の叙情歌でもある。

特に、兄弟の関係を「一等隠枝」と書かれて木の枝に喩えていることは、他の文献には、見当たらない。ただ、中国の長恨歌では、「比翼連理

枝」と歌って夫婦の仲良さをあらわしている。また、『天字文』では「同気連枝」⁶⁾という兄弟の結び付きを表す言葉が見られる。恐らく中国の影響を月明師は受けたかもしれない。ところが兄弟の結び付きを「一等隠枝」と表現しているのは、叙情性の高い月明師の独特の表現であると思われる。

同腹の兄弟は、生と死を共にするという意識が存在していたかとも思われる。二人が合わせて一人であるという感覚があったことで「一等隠枝」と歌われることになったのではないだろうか。そして「万葉集」の「大伯皇女挽歌」からもほぼ似たような意識が考えられる。それに関しては三のところでも述べることにしたい。

また、妹に訪れた死を「早隠風末」と歌う事や死の対象である妹を「葉」に喩えることは誠に文学的である。吹かれる風によって葉の行方が分からないように死をむかえた妹の行方が分からないということを「道」として描写することは、万葉集の挽歌にはよく見られる表現である。(後述)

「祭亡妹歌」の作者である月明師は、二つの立場を持っている。一つは、僧侶としての月明、もう一つは亡妹の実兄としての月明である。「祭亡妹歌」は、実兄としての立場で歌われているが、一方では、彼は一人の僧侶である。この表面的な僧侶の面から、一般には仏教詩として捉えられることが多い。しかし、この「祭亡妹歌」は、いままで述べてきたように根底には、実兄としての悲しみや亡妹への永遠の愛情が歌の全体に脈々と流れていることが強く感じられる。

また歌の構造からみると、亡妹への愛情が歌の1句から8句まで段々高潮してきて9句に「阿也」で最高潮に達する。そして「阿也」と歌うことから、実兄の月明師の諦念と決意が同時に交差している。実兄である月明師の決意は、「彌陁利良逢乎吾道修良待古如」で、現実の僧侶の立場に戻ることによって歌を終わらせているのだ。

次に「万葉集」の中の「弟の死を送る大伯皇女の嘆きの歌」に注目し、これを通して、古代日本における兄弟観を考察してみたい。

3. 姉の嘆き(大伯皇女挽歌)

大津皇子竊かに伊勢の神宮に下りて、上り来る時に大伯皇子の作らず歌二首

我が背子を大和へ遣るとき夜更けて曉露に我が立ち濡れし(②105)

ふたり行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ(106)

大津皇子の薨ぜし後に、大伯皇女、伊勢の齋宮より京に上る時に作らず歌二首

神風の伊勢の国にもあらましを何しか来けむ君もあらなくに(163)

見まく欲り我がする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに(164)

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷しびて作らず歌二首

うつそみの人にある我れや明日よりは二上山を弟背と我れ見む(165)

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はなくに(166)

右の一首は、今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮より京に還る時に、路の上に花を見て感傷哀咽してこの歌を作るか。

大伯皇女と大津皇子は、天智天皇と大田皇女の間生まれた同腹の姉弟である。まだ幼い時に母と死別し、姉は、大伯皇女が14歳の時には伊勢神宮の「神の乙女」として任ぜられ、弟である大津皇子と生別することになる。弟である大津皇子が姉の所へ密かに訪れたのは、天武天皇の死の前後の時である。何かの目的をもって密かに姉のいる伊勢へ下ってきたその弟を見送る時の歌が巻二の105番歌と106番歌である。

我が背子を大和へ遣るとき夜更けて曉露に我が立ち濡れし。(②105)

ふたり行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ(106)

この2首の歌から、弟に対する姉の深い愛情を感じられる。それは、弟である大津皇子を都へ送ってその弟の姿が見えなくなるまで門の前に立って無事に都へ着くことを願う姉の心が、「曉露に我が立ち濡れし」と

歌うことになったと思われる。弟の姿はもう闇の中に隠れてしまって自分の視野を去っていたが、その立場から離れられず明方近くまで曉露にしとどに濡れてしまうほどの不安感を姉である大伯皇女は感じたに違いない。その不安感は、次の短歌で「ふたり行けど行く過ぎかたき秋山をいかに君がひとり越ゆらむ」と歌われることになる。「ふたり行けど」と歌うことは、単純な数としての「二人」ではなく、同母姉弟の結びつきの意識上に表れた「二人」ではないだろうか。窪田空穂氏はこの「二人」は、「君が独り」に対比している関係上、「二人」は御兄弟を意味させた⁷⁾。と解いている。

次に注目したいのは、②106番歌に見られる「秋山」である。その「秋山」を「行き過ぎかたき」と歌うことは、後の弟に置かれる状況、即ち謀反を起こした罪でこの世を去るということを暗示した上の表現であると思われる。つまり「秋山」は死者の道であり、ただ表面的な寂しい季節感を表すものとして取り上げられているのではなく、「迷う道」の意識が内在した上の表現ではなかろうか。

秋山の黄葉を茂み感ひぬる妹を求めむ山道知らずも (②208)

右の歌は、ある秋の日に柿本朝臣人麻呂の妻が亡くなった時の歌である。「秋山」の道は、黄葉が茂っていて迷ってしまうような道であった。即ち、通りにくい道でもあった。このような意識をもって大伯皇女は「ふたり行けど行き過ぎかたき秋山」と歌っていると思われる。だから弟が秋山を通して都まで着くということは決して簡単ではなかっただろう。

大伯皇女にとって大津皇子は同母姉弟であった。生と死をともに受け取る意識が同母兄弟の場合、存在していたのではないだろうか。大伯皇女は、そのような意識をもって「ふたり行けど」と歌い、終句で「ひとり越ゆらむ」と歌う。第一人で秋山を越えていく道は、本当は共に歩く道であるのに、現実ではそうすることができないことを悲しんでいるようにも

思われる。姉である大伯皇女は、現在伊勢神宮の乙女として一般の人々とは会えない状況であった。また、弟が政治的な犠牲者としてこの世を去っていくかも知れない不吉な予感を姉である大伯皇女は感じたかも知れない。それで、「さ夜更けて曉露に我が立ち濡れし」と神の乙女として露に濡れてはいけないタブーをおかしての行動は、実弟への絶大な愛情から生まれたものだと思う。大伯皇女は神の乙女としての資格より純粹な実姉の資格でこの歌を歌われているのだ。

同母兄弟の意識に関して、二で兄の嘆きの歌として「郷歌」の「祭亡妹歌」の部分でも触れたように、古代における同母兄弟の意識は韓国と日本は殆ど似ているように思われる。同母兄弟の場合は、個々の個性をもって単独の存在としてより共にして一つになるという感覚が存在していたと思われる。

それは、「祭亡妹歌」で「一等隠枝良出古去奴隠処毛冬乎丁」と歌っており、また大伯皇女も「ふたり行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ」と歌っていることからいえるのではないかと。弟に対する絶えざる不安、何一つ弟の力になれなかったという口惜しさは、結局弟の死を認めざるをえない現実として訪れてくる。

大津皇子の薨ぜし後に、大伯皇女、伊勢の斎宮より京に上る時に作らず歌二首

神風の伊勢の国にもあらましを何しか来けむ君もあらなくに (2163)
見まく欲り我がする君もあらなくに何しか来けむ馬疲るるに (164)

大津皇子が亡くなった後に、大伯皇女が伊勢から帰京した時に作られた歌二首は、唯一の弟を失った悲しみをいまだ整理できない姉の嘆きである。この二首について伊藤博氏は、次のように述べている。

この二首は、前の沈痛な歌に対して解放的なうたいぶりを見せ、激越な響きを露出しているのが注目される。二首は、「何しか来けむ」と「君も

あらなくに」とを双方に使用し、「何しか来けむ」に中心を置く。そして、第一首の「神風の伊勢の国にもあなましを」と第二首の「馬疲るるに」とは、気持ちとしては同じことをいっている。こうして、二首が、心余って、一つでうたえるものを組歌風に表出したものであることは歴然としている。さらに、当面の二首には、前の二首とは対照的に、心情を表面に押し出した物言いが目立つ。「何しか来けむ」と自責する表現を中心として、「あなましを」、「見まく欲り我がする」など。また、「あらなくに」、「馬疲るるに」の「に」が放つ詰問に似た呼吸も同様にみることができ。斎宮の往還は、数多い男女の官人を従え、仰山な荷物を積んだいたって大仰なものであった(延喜式)。そんな身心ともに疲れる物々しい旅などせずに、潔斎につぐ潔斎の生活をつづけた神風の伊勢の国、その孤愁の国にいた方がまだましだったというのが「神風の伊勢の国にもあなましを」、「馬疲るるに」の嘆きであろうどうやら、二首の激越な調子は、やりどころのない「怒り」をさえ含んでいるようだ。

『万葉集の歌人と作品上』(古代和歌史の研究3)

大伯皇女が神の乙女として、孤独な生活に堪えることができたのは、ただ一人の実弟であった大津皇子が生存しているからであった。早く母と死別し、さらに、唯一の弟と死別して一人残された姉の寂しさは、計りしれないぐらいの嘆きであったに違いない。

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大伯皇女の哀傷しびて作らず歌二首

うつそみの人にある我れや明日よりは二上山を弟背と我れ見む(②165)

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はなくに(166)

右の二首は、大津皇子を二上山に葬る時、大伯皇女が歌った歌で一六五番歌に「明日よりは二上山を弟背と我れ見む」と歌い、現実の中に残された姉一人ではどうしても生きられないことを歌っている。だから、弟が葬られている「二上山」をその弟の代わりとして共に生きたいと歌って

いるのだ。②165番歌に見られる「明日よりは」に注目してみたい。

「明日よりは」という未来に続く悲しみは、現実の悲しみを悲しみとしてありのままに確認終え視線が「うつそみ」の時が今日を経て明日へと続くという当たり前のことに気付いたときにこそ、初めて発見されるものといえる。大津皇子の肉体がとりかえしようもなくこの「うつそみ」から消え去ったとき、不滅であるはずの魂のよりしろとして、「うつそみの我」大伯は二上山を仰ぐのである。彼女の生の続く限り、その悲しみのうちに弟大津皇子の魂は息づいて封じ込められる。

(渡辺護「あしびの文芸」『古代史論集』)

「明日よりは」に込められているのは、愛する弟と死別した姉の諦念と決意である。弟がもう二度とこの世には戻ってこないことを認めた上の諦念として、「明日よりは」と決意しているものと思われる。その気持ちは、弟がいないこの世をこのまま諦めることなく、弟が埋められた「二上山」を弟だと思って、これからの残った人生を歩もうという意志である。

「明日よりは」と歌うことで、大伯皇女は、愛する弟の死を認めた上で一人残された自分自身がこれから歩むべき道を確認、残りの人生の指針を確認していこうとする強い気持ちの表現を歌っている。

4. 終わりに

以上で古代韓・日における兄弟の死を「郷歌」の「祭亡妹歌」と「万葉集」の「大伯皇女挽歌」を中心に考察してみた。「祭亡妹歌」と「大伯皇女挽歌」には、大きく三つの共通点が窺える。まず、兄弟の死に対する意識が似通っている部分、そして死の訪れの季節として「秋」が捉えられているのは興味ぶかいところである。また、歌の構造からみると、現実の中で兄弟の死を認めたくない気持ちが全般的に流れているし、結局、最後の句

において諦念と決意として終わらせている部分もそうである。

古代の兄弟の死は、同母兄弟の場合、生だけではなく死も共にするという意識があったにちがいない。「祭亡妹歌」の「一等隠枝出古去奴隠処毛冬乎丁」と歌うことと、「大伯皇女挽歌」の「ふたり行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ(②106)」歌っていることから生だけではなく死も共にするという「二人」が合わさってはじめて完全な「一人」になるという意識があったと考えられる。

ただ、月明師の「祭亡妹歌」では兄弟の結びつきとして「一等隠枝」に喩える点まことに高い文学性を有した表現であると思われる。

次に注目すべきは、「祭亡妹歌」と「大伯皇女挽歌(②106)」で「ふたり行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ」歌って、「死の訪れる季節として「秋」を暗示して歌っている点である。「祭亡妹歌」の5-6句で「於内秋察早隠風未此矣彼矣浮良落履葉如」と歌って妹を「葉」に喩え、その「葉」を落としてしまう季節として「於内秋察早隠風未」と月明師は歌っている。大伯皇女も巻二の106番歌で「二人行けど行き過ぎかたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ」と歌っている。この歌は、まるで間もなく弟に訪れる死を予感している様な歌にも受け取られる。実際、大津皇子は朱鳥元年(686)10月3日に謀反の罪で亡くなる。丁度死ぬ前の歌で、季節は「秋」になる。「万葉集」に見られる「秋山」は、単に美しいだけではなく、恐怖の対象でもあったことだろう。だから、大伯皇女は、「行きすぎかたき秋山」と歌うことになり、その不安の心105番歌の「曉露に我が立ち濡れし」によって窺える。この部分に関してはすでに三の姉の嘆きのところで述べた。

次は、各々の歌の構造上の共通性である。「祭亡妹歌」と「大伯皇女挽歌」は、兄弟の死を認めたくない兄と姉の気持ちが諦念と決意を持って各々の歌の終わりの部分に出てくる。

「祭亡妹歌」では9句の始まりの言葉として「阿也」と感嘆詞を用いて妹の

死を現実のなかで受けとっている。妹の死を兄である月明師は再認識している。それは、実兄である月明師が妹の死を認めざるをえない現実の中での諦念から新しい決意へと向かう交差点を成す句である。彼は、妹の死を通して、人の生と死という重代な問題を見つめたのである。そして、彼は現実の僧侶としての自分自身に戻るしかなかった。「彌陀利良逢乎吾道修待古如」という新しい決意によって歌は結ばれる。

「大伯皇女挽歌」の「うつそみの人にある我れや明日よりは二上山を弟背と我れ見む」(②165)と歌うことから弟の死を現実の中で認めている。それが「うつそみの人にある我れや」である。そのうえで弟の死を「明日よりは」と歌い、現実の神の乙女の身分に立ち戻って、「二上山を弟背と我れ見む」という明日からの新しい決意を歌い上げた。「祭亡妹歌」の「阿也」と大伯皇女の「明日よりは」という言葉は、歌の中で終わりの句において諦念と共に新しい決意を表している同様な機能を果たしているようである。

ところが、兄弟の死において古代の韓国と日本は死を捉える意識に少し差があるように思われる。まず、「祭亡妹歌」の作者である月明師の死の意識に関して朴魯埠氏と金東旭氏の論を上げてみると次のようである。

月明師の死の意識は、修道人や生を達観した人のそれではなく、また、僧侶や花郎の死生観とも無関係なものである。この時代の精神とも関連させることができると思われる。極めて平凡な市井人、自由人、率直な死の観念が「祭亡妹歌」に反映されていると考えられる。それは、純粋な人間本性、その心の底から湧き出る悲痛と恐怖、そして、普遍的な無常観の表れであり、この歌はそのようなものの結晶体である⁸⁾。
(『新羅歌謡の研究』(祭亡妹歌))

月明師は道を修めながら、彌陀利へ到達することで、前触れもなく訪れる死の恐怖を克服しようとした。しかし、ここで注意しておきたいのは、月明師の実践的能力で、死が克服されたというのではないという事実である。「彌陀利」は、月明師の能力でなった時空ではなく、仏教的秩序の中に前もって設定されている時空である。月明師の実践的

能力は、このような彌陁刹を認めることによって死の世界を克服するに至ることである。 『死の認識を通してみた新羅歌の性格』

上で述べているように妹の死の悲しみを兄である月明師は、9句で「阿也」と歌って妹の死に対する諦念と「彌陁刹」というところで妹にあえるということを現実の中での希望として「彌陁刹良逢乎吾道修待古如」と歌って、新たに決意をしている。

反面、大伯皇女の165番歌では「うつそみの人にある我れや明日よりは二上山を弟背と我れ見む」と歌って「明日よりは」を用いて諦念と共に新しく決意していることは「祭亡妹歌」と変わりはないが、現実で生ける希望として、弟が葬られている「二上山」を見ていくことによって弟の死を克服しようとするのは興味深いところである。

大伯皇女は弟がない現実を肉眼にみえる「二上山」を対象に焦点を合わすことによって弟の死を認めているのだ。兄弟の死を「祭亡妹歌」の「彌陁刹良逢乎吾」と歌って死後の世界で妹と会えるということで妹の死を克服しようとする意識と比べて、大伯皇女の「明日よりは二上山を弟背と我れ見む」の歌いは、現実の中で目に見える対象である「二上山」を弟の代わりものとして、死を克服しようとする意識のほうが更に現実的であると思われる。古代韓.日における死観に関しては今後の課題としておきたい。

【注】

- 1) 新羅三五代の王(七四二—七六五)
- 2) 景德王十九(七六〇)年四月に二つの太陽が現れ十日過ぎても消えずにいたので王がこの僧を呼び率歌(도솔가)を作らせたところ消えたという。『三国遺事 卷第五』
- 3) 祭亡妹歌原文『三国遺事卷第五』韓国語訳—梁柱東『古歌研究』日本語訳—本稿
- 4) 原文

삶과 죽음이 모두 함께 여기에 존재하고 있음의 경우 불교의 緣起論에 입각해서 해석할 여지가 없지 않아 있지만 이는 儒敎에서도 生死一

如라 하야, 삶과 죽음의 간격을 부인하고 있고 道敎에서도 마찬가지로 삶은 죽음의 同伴者요, 죽음은 삶買의 시초로 보고 있으므로 꼭 仏敎 전유물로만 볼 수는 없을 것이다.

5) 原文

‘아오 弥陀刹에 맞보올 내/道 닷가 기드리고다’에서 月明師가 중점술 든 詩語는 맞보올에 있었고, 그 전후에 놓여있는 弥陀刹이나 道 닷가에 있지 않았다고 본다. 이 두 개의 언어는 虛言이거나 아니면 상부적인 용어일 수 있다. 죽은 누이를 슬퍼하고 애통해 하지않던 情感의 인간 月明師는 집요하게 再會를 갈망하고 있다. 그런데 이 再會는 현실적으로 보아 죽음 저편의 세계에서만 이룩될 수 있는 일임이 분명하나, 그때 그의 본심은 弥陀刹에만 국한되어 있지 않았고, 앞에서의 즐기찬 흐름으로 보아 현실세계에서도 幻想으로나마 만나기를 기원한 것으로 볼 수 있다. 그만큼 그의 심정은 절실한 것이었고, 이점 가식없는 그의 본성이 결사에서 끝까지 애절하게 노출되고 있음을 확인할 수 있다.

6) (南朝梁·周興嗣)『天字文』- “孔怀兄弟, 同氣連枝”

7) 窪田空穂 『万葉集評釈』

8) 月明師의 죽음意識은 修道人이나 인생을 달관한 사람의 그것도 아니고, 또 僧侶나 郎徒의 死生觀과도 무관한 것이며 그 무렵 시대정신과도 연관지울 수 없는 그런 것으로 파악하였다. 지극히 평범한 市井人, 자유인의 가식없는 죽음觀이 祭亡妹歌에 반영되어 있다고 보았다. 그것은 순수한 인간본성 저 밑바닥에서부터 우러나온 비통과 공포, 그리고 보편적인 無常感 그런 것의 결정체라 이를 만한 것이라고 논하였다.

【參考文獻】

- | | |
|-----|------------------------------------|
| 朴魯埵 | 『新羅歌謠의 研究』 열화당 1982年 |
| 金圭泰 | 『鄉歌』 정음사 1986年 |
| 李仁福 | 『韓國文學에 나타난 죽음 意識의 史的 研究』 열화당 1979年 |
| 金常憶 | 『鄉歌』 明文堂 1974年 |
| 金千憲 | 『韓國家族制度 研究』 서울대학교출판부 1969年 |
| 金富軾 | 『三國史記(상. 하)』 고전연구실 옮김 1959年 |

- 崔喆·安大會 『均如傳』 새문사 1986年
박석봉·고경식 『삼국유사』 서문문화사 1989年
申采浩 『조선상고사上,下』 丹濟申采浩先生記念事業會 1988年
金東旭 『三國遺事의文藝的研究』 새문사 1982年
최철·설성경 『향가의연구』 정음사 1984年
金鍾雨 『鄉歌文學研究』 二友出版社 1983年
梁柱東 『古歌研究』 一潮閣 1965年
宋哲來 『韓日古代歌謠の比較研究』 學文社 1983年
沢瀉久孝 『万葉集注釈』 中央公論社 1957-77年
窪田空穂 『万葉集評釈』 東京堂出版 1985年
青木生子他四人校注 『新潮日本古典集成(万葉集)』 新潮社 1976-84年
伊藤博 『万葉集釈注』 集英社 1995年
伊藤博 『万葉集の歌人と作品』 塙書房 1975年
渡辺護 『古代史論集(あしびの文芸)』 塙書房 1988年
伊藤博 『万葉集』(上,下) 本文角川文庫 1975年

【要旨】

古代 韓·日에 있어서 兄弟의 죽음을 「鄉歌」의 「祭亡妹歌」와 「万葉集」의 「大伯皇女挽歌」을 중심으로 고찰하여 보았다. 「祭亡妹歌」와 「大伯皇女挽歌」에는 크게 3가지의 공통점을 찾을 수 있다. 먼저, 兄弟의 죽음에 意識이 담긴 점 그리고, 죽음이 찾아오는 계절로써 「秋」이 비유로 들고 있다는 점. 노래의 구조상 현실 속에서 兄弟의 죽음을 인정하지 않으려는 마음이 노래의 대부분을 이루고 最終句에서 체념과 결의로 노래를 끝마치고 있는 점들을 들 수 있다.

古代에 있어서 같은 어머니에게서 출생한 형제의 경우, 삶뿐만 아니라 죽음까지 함께 하려는 意識이 있었음이 틀림없다. 그것은 「祭亡妹歌」의 「一等隱枝出古去奴隱處毛冬平」라고 노래하는 것과 「大伯皇女挽歌」의 「ふたり行けど行きすぎかたき秋山をいかにか君がひとり超ゆるまむ(②106)」라고 노래하는 것이 兄弟 둘이 모여 비로소 완전한 한 사람을 이룬다는 意識을 내포한 표현이라 생각되어진다.

다음은, 「祭亡妹歌」의 5-6句에서 「於内秋察早隱風未矣彼矣浮良落履葉如」와 「大伯皇女挽歌(②106)」에서 「ふたり行けど行きすぎかたき秋山をいかにか君が越ゆるむ」는, 두 노래 모두 죽음이 찾아오는 계절로써 「秋」을 암시하고 노래하고 있다는 점을 주목하고자 한다.

「祭亡妹歌」의 5-6句에서 여동생을 「葉」에 비유해, 그 「葉」을 떨어뜨리는 계절로써 「於内秋察早隱風未」라고 月明師는 노래하고 있다. 大伯皇女도 106번 노래에서 「ふたり行けど行きすぎかたき秋山をいかにか君が越ゆるむ」라고 노래하고 있다. 이 노래는 머지않아 남동생에게 닥칠 죽음을 예감한 듯이 노래를 읊고 있다. 실제 大津皇子는, 朱鳥元年(686)10月 3日 모반의 죄로 죽음을 맞고, 계절로써는 「秋」에 해당된다.

「万葉集」에 보여지는 「秋山」는 단순한 아름다움의 대상으로써 뿐만 아니라 공포의 대상이기도 했다. 大伯皇女가 「行きすぎかたき秋山」라고 노래함은, 그 불안한 심정을 105번 노래에서 「曉露に我が立ち濡れし」라고 노래함으로 충분히 엿볼 수 있지 않을까.

다음은 「祭亡妹歌」와 「大伯皇女挽歌」 두 노래의 구조상의 공통점이다. 두 노래 모두 형제의 죽음을 인정하려 하지 않는兄과 姉의 마음이 체념과 결의로써 각 노래의 마지막 부분을 장식하면서 노래를 마치고 있다.

「祭亡妹歌」의 경우, 9句의 「阿也」는 감탄사를 이용해서 여동생의 죽음을 인정하지 않으면 안 될 현실 속의 체념과 함께 새로운 결의로 마음을 다지는 교차점의 句이다. 그는 여동생의 죽음을 통해서 인간의 삶과 죽음이라는 중대한 문제를 생각했으리라 본다. 그래서 그는 현실 속의 신분인 승려로 돌아옴으로써 여동생의 죽음을 현실 속에서 인정했고 동시에, 새로운 결의로써 「彌陀利良逢乎吾道修待古如」라고 노래함으로써 「祭亡妹歌」를 끝마치고 있다.

「大伯皇女挽歌」의 165번 노래에서도 「うつそみの人にある我れや明日よりは二上山を弟背と我れ見む」라고 읊고 있음은 「祭亡妹歌」와 마찬가지로 남동생의 죽음을 현실 속에서 인정하고 있음은 바로 「うつそみの人にある我れや」라고 노래하는 것에서도 충분히 알 수 있다. 남동생의 죽음을 인정함과 동시에 현실의 오도매의 신분으로 돌아와 「明日よりは二上山を弟背と我れ見む」라고 새로운 결의를 다지고 있음을 알 수 있다. 노래의 구성상 「祭亡妹歌」의 「阿也」나 「大伯皇女挽歌」, 「明日よりは」 모두 노래의 마지막 부분에 속해, 체념과 동시에 새로운 결의를 나타내는 同様の 同機能을 취하고 있다고 보여진다.